

おちんちんが見たい女の子、隣の席の男の子に頼んで見せてもらう！

性に興味が湧き出した女の子、彩芽は最近インターネットで男性のおちんちんの画像を見ることに夢中になっていた。彼女は夜な夜なネットでエロ画像を探しては興奮を隠しきれず、頭の中はおちんちんでいっぱいだった。そんな中、彼女は単純におちんちんを生で見たいという強烈な性欲に駆られてはじめた。学校で隣の席の拓也に対する視線も、自然と彼の股間に向けられるようになっていた。彼女はおちんちんの細かい構造、硬さや温度、そして実際の手触りを知りたかった。インターネットの画像だけでは満足できず、生で見ることでさらなる興奮を得たいと思っていた。

放課後、教室にはほとんど生徒が残っていなかった。隣の席の拓也はいつも通り、ノートを整理していた。彩芽はこの瞬間を狙って、心臓がドキドキする中で拓也に話しかけた。

「ねえ、拓也くん、ちょっとお願いがあるんだけど……」彩芽は声が震えるのを感じながら言った。彼女の声には、緊張と興奮が交錯していた。

拓也は少し驚いた表情で彩芽を見つめた。「何？」

「実は、うん……拓也くんのおちんちん見たいなって思って。」彩芽は顔を真っ赤にして、目を逸らした。彼女は性欲が爆発しそうになっていた。同級生の拓也のおちんちんを直接見てみたいという衝動だけが彼女を動かしていた。

拓也は一瞬、驚きで固まった。彼はこんなリクエストを想像もしなかったが、好奇心と

少しの興奮を感じた。「え、まじで？ここで？」と小声で聞いた。

「うん、でも、もし嫌だったらいいんだよ。ごめんね、変なこと頼んじゃって。」彩芽は慌てて付け加えた。

「いや、いいよ。見たいなら見せてあげるよ。」拓也は少し照れながらも、興味津々の表情で答えた。彼は席から立ち上がり、教室の隅に移動し、周りに誰もいないことを確認した。

彩芽は心臓がドキドキするのを感じながら、拓也の後をついていった。拓也はズボンのファスナーを下ろし、トランクスが現れた。トランクス越しにおちんちんの膨らみが見え、シルエットがくっきりと浮かび上がっていた。

「これでいい？」拓也は確認するように彩芽を見た。おちんちんの形がくっきりと見え、

先っぽがちょっと膨らんでるのも、金玉の形も目に見える。

「う、うん……でももっと、しっかり見たい。パンツ下ろして欲しい…」彩芽は緊張しながらも、性欲に駆られて言った。

拓也はその言葉を聞くと黙ってゆっくりと下着を下ろし、彩芽の目の前に包茎のおちんちんが完全に露わになった。